

中村 哲医師 物語

—あるがままの現実を受け入れて—

■作/川名 真央(東京慈恵会医科大学1年) ■画/武下 純也

中村 哲 (なかむらてつ)
九州大学医学部卒—
一九八四年 パキスタン
北西辺境州の州都
ペシャワールに赴任

ハンセン病コントロール計画を
柱にした貧民層の診療に携わり
二〇〇二年春から
アフガン東部山村で
「緑の大地計画」を継続中

クナール河流域に灌漑用水路を
引いている



幼少時代

一九四六年（昭和二十年）
九月十五日
福岡県福岡市に中村家の
第三子で長男として生まれる――



……
よく噛んで
食べなさい

コホン

おかわり

にぎやかな
家庭環境で育ったが
父親は厳格だった

私も



中村は
すごいな

本を読むことが多い子供で
あだ名は「こ隠居さん」
三歳にして文字が読め
小学校で論語を読破
するほどずば抜けた
秀才ぶりを発揮していた



社会の？

日本の役に
立つ…？



そんな中村に
父は――

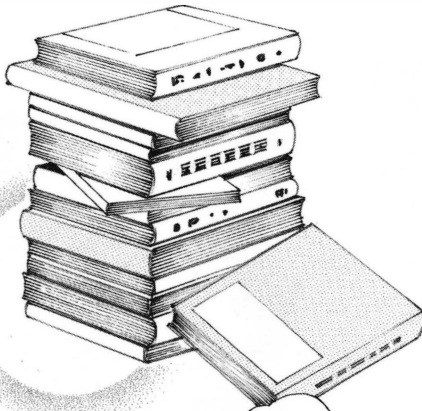
早く大きくなって
日本の役に立つ
人間になれ！

親は捨ててもいい
社会の役に立つ
人間になれ！

――と何度となく
言い聞かせた



あまりにも早くに知性を
身に付けた少年は
中学生の頃から
「世間と馴染めない」という
感覚を持っていた



友人たちが話す価値観と
自分の価値観の間で
「相手に疑いを持ってしまつた」という感覚が生まれた

少年時代



おいしい
中村くん

はい？

え？
教会にですか…

そんな彼に
大きな出会いが
訪れる――

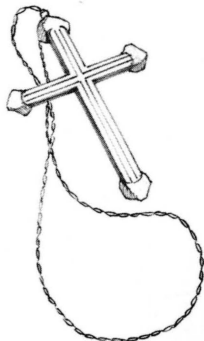
ミッション系の
中学に通っていたため
学校から勧められて
教会へ通い始めた



そこで
全盲の聖職者
藤井健児牧師と
出会い



キリスト教の
洗礼を受けた



藤井先生は全盲で
中途失明だった
しかし先生は
苦勞話はもちろんのこと
悲惨な体験話だとか
そういう話は
全くしなかった

普通そういう人は
自分のことを言う人が
割と多いと思うのですが
藤井先生は全くなかった
むしろその状況下でも
大変明るい方でした

中村(談)



高校に進学した
中村は—



文学に関係のない
物理の試験などは
平気で0点を取っていた

哲—
なんねこの
試験の点数は…

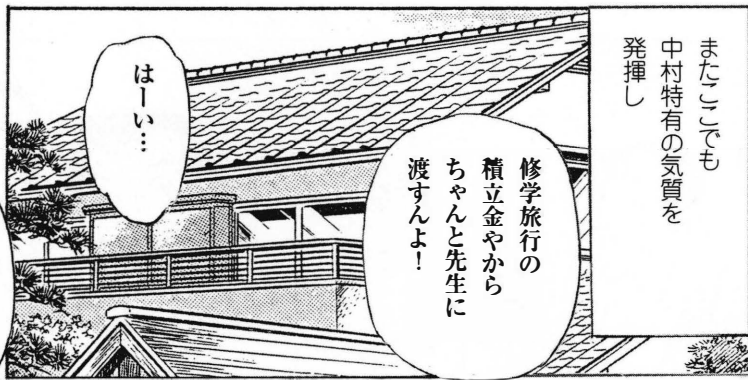
…知らん

俺は
文学者になる

またこども
中村特有の氣質を
発揮し



へへ…
だいぶ
貯まったぞ!



は—い…

修学旅行の
積立金やから
ちゃんと先生に
渡すんよ!

高校の
修学旅行には
参加せず

親や先生に黙って
積み立て金を流用

一人で
「九州の脊梁山脈横断」
に出掛け

山をほつつき
歩いて—

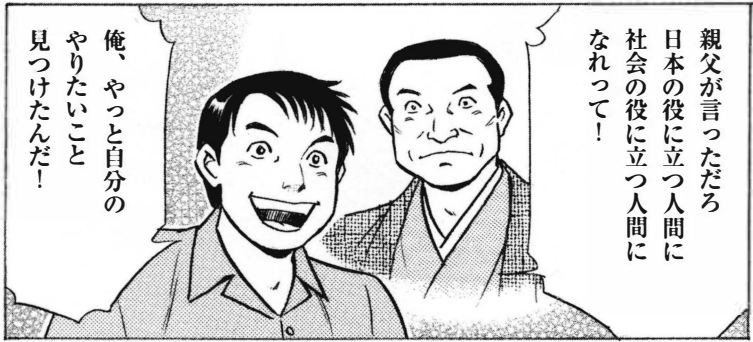
相変わらず
昆虫採集に
明け暮れる日々を
過ごした

キレイな
蝶だなあ





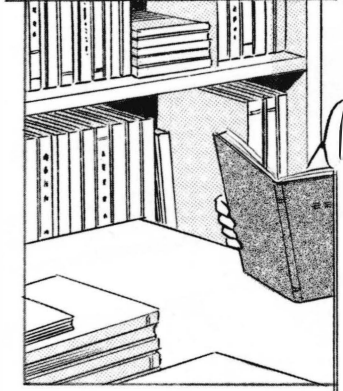
そんな中村が
「俺は医師になる」と
言い出したのには
周囲が驚かないわけが
なかった



「人の嫌がることをなせ
一人の人間として生まれ
生きる」時流に流されない
ことが大切」と気付き
医師を志す
きつかけを掴んだ

そんな折
内村鑑三の著
『後世への最大遺物』
に出合い

その状況下で中村は
昆虫学を学びたい希望と
「日本人が何かをしなくては
いけないのではないか」と
いう義侠心の間で揺れていた



みんながやるから
自分もなんとなくやる...
つまらない!

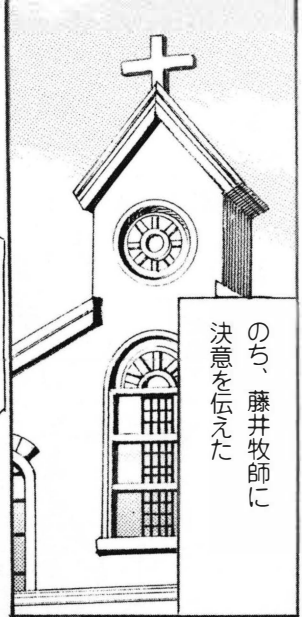




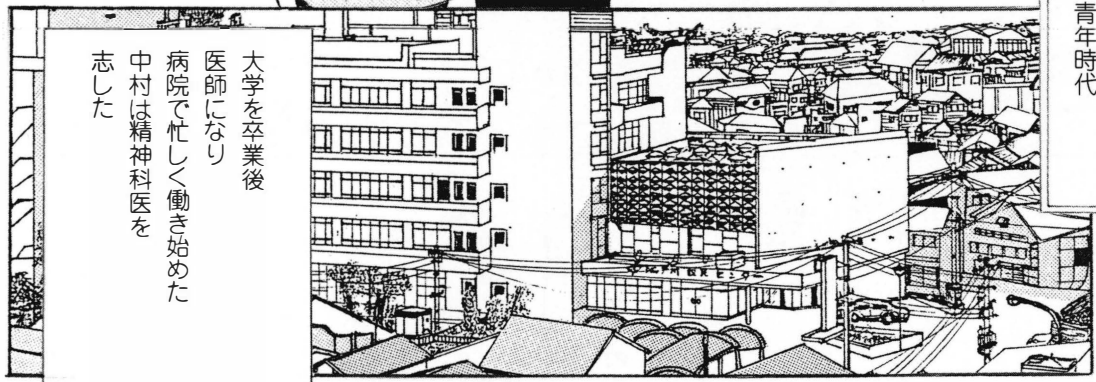
それは
素晴らしい
ことです
キミなら
やれますよ!



藤井先生
僕は医者になって
無医村などの
恵まれない人々の
ために働きたい!



のち、藤井牧師に
決意を伝えた



青年時代

大学を卒業後
医師になり
病院で忙しく働き始めた
中村は精神科医を
志した



そんなある日——
予期せぬ出来事が
大きな転換をもたらした



だけど……だからこそ
他人の痛みがわかる
人間になりましたよ

対人恐怖症や赤面症で
悩んだことがあり「人の心」
に興味があったからた

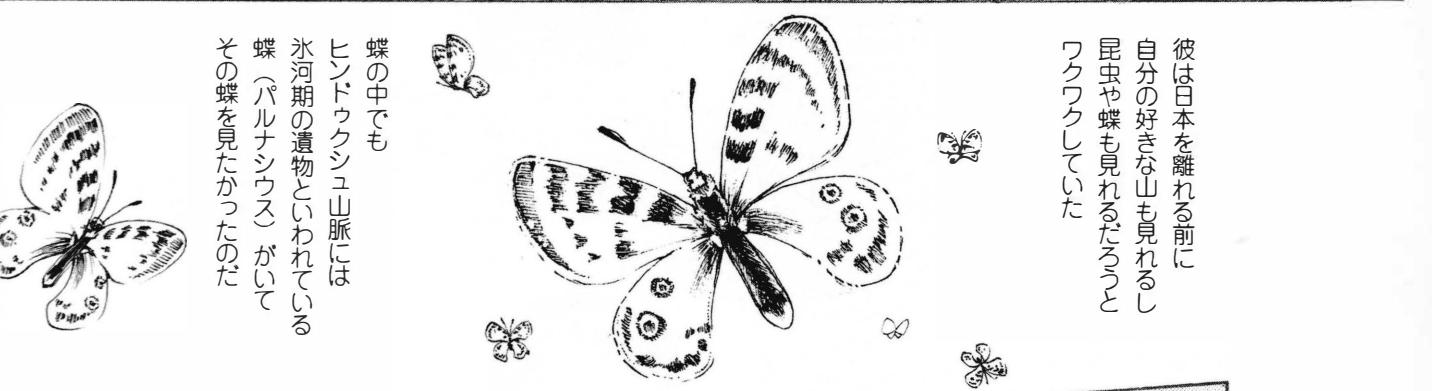


32歳にして
初めて飛行機に
乗り——

福岡登高会の
登山隊医師として
生まれて初めて
九州の地を出た



冒険に近い形でパキスタン
(ヒンドウクシユ山脈)へ赴いた



彼は日本を離れる前に
自分の好きな山も見れるし
昆虫や蝶も見れるだろうと
ワクワクしていた

蝶の中でも
ヒンドウクシユ山脈には
氷河期の遺物といわれている
蝶（バルナシウス）がいて
その蝶を見たかったのだ



しかし現実には
あまりにも
違い過ぎた

現地で中村は
病気で苦しんでいる人々を
何度も目の当たりにした



治療の機会に恵まれず
粗末な食事だけを
与えられて病状は
ただ進むだけ…



この状況に
胸が痛んだ

キャラバンの道中
村人たちを
治療しながら…



お願いシマス
先生…

こんなにひどい結核や
感染症の患者に
気休めの仁丹や
栄養剤しか
渡せないなんて
……



薬を必ず持つて
また来るから…
約束します！



機会があれば
必ずここに
戻ってこよう！

約束は
守らなければ
ならない！



ここには世界の中で
最も医者が必要として
いる
人達がいる…





中村はこの体験から

「求められる所で働ける」

ということに生きがいを感じ

日本と遠い異国の現状の隔差に

不条理を感じていたのだろう

「医師」としての豊かな能力は

日本で発揮できても

人を助ける「人間」としての

良心を満たす場はパキスタンしかない

パキスタンは自分を

必要としていると

実感できたのであろう

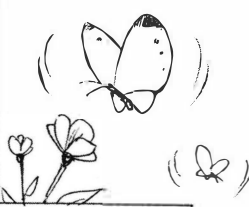
彼の胸の中には
「放つてはおけぬ
患者たち」への思いが
こびりついてた



熱い思いがとどまらず
「海外医療ボランティア
のパイオニア」といふべき
人物と講演会で出会う



今頃患者たちは
どうしている
だろうか…



日本に戻ってからも
パキスタンでの出来事
が頭を離れることは
なかった

その後その人物に
自分の思いを
手紙で伝えた



うーむ…

岩村医師は
中村の文面から伝わってくる
熱意と人間性を
感じ取ったのである



パイオニアと呼ばれる
人物は「JOCSの顔」
といふべき人物
岩村昇氏である

JOCS(日本キリスト教海外医療協会)——「私があなたがたを愛したように、あなたがたもたがいに愛し合いなさい」という聖書の言葉に基づき、アジアをはじめ保健医療が十分でない地域へ協力を行っている、民間の海外協力団体(NGO)です。
岩村昇氏 2005年11月27日逝去。



こうしてパキスタンへの
道筋が開かれた

さつきく岩村医師は
中村にJOCsの医師として
現地のペシャワール・ミッシヨ
ン病院へ赴任を勧めたのである



それはあたくも
好きだった蝶々が
中村をこの地へと
導いたのかもしれない

パキスタンを初めて
訪れてから6年後
彼は北西辺境州の
ペシャワールで
働くことになる